
落書き

いえやす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落書き

【Zコード】

N6172D

【作者名】 いえやす

【あらすじ】

死んだ人が残していくた落書きを辿っていくと、そこにはまた落書きがありました。

その古びた廃校は呪われているともうぱらの噂だった。

灰黒く汚れた壁、ガラスの割られた窓を見上げながら、剛は改めてそのことを思い出した。

近くで見ると昼間でも結構不気味だったが、壊れたドアから中のぞくと埃だらけの廊下が長く延びているのが見える。

窓からの日差しで視界は良好だ。

剛は覚悟を決めるとおそれおそる校舎の中に足を踏み入れた。床板を踏みしめる自分の足音が、静まり返った建物の中でやけに響く。

とりあえず手近な教室に入つてみた。

壁に大きな黒板がかかっているのがいかにも学校らしいが、中は酷く荒れていた。

整然と並べられていたであろう机やイスは「ことじ」とくなぎ倒され、さらにはどこかの不法業者が入り込んでいるのか、足の踏み場のもないほどに、粗大ゴミが散乱している。

テレビ、冷蔵庫、ベッドや絨毯などゴミの中、剛は足元に注意しながら廃棄物の間を見て回つた。

剛の目的は金田のものだ。あわよくば換金できそうな銅や鉄の塊が捨てられていないかとわざわざこんなところまでやって来てみたのだ。

「ゴミの中を少し漁つてみたが、どうも良い感じのものは見当たらぬ。

他の教室を探してみようと顔を上げたとき、ちょうど正面にあつた黒板が目に入った。

入つて来た時は気がつかなかつたが、真ん中の部分の埃がそこだけ綺麗に拭われて白いチョークで大きく文字が書かれていた。

『「この落書きを見つけた人にお願いです』

文章の最後にチョークでなぜか下向きに矢印が付いていた。

何だろ?』

剛は黒板に近づいてみた。すると矢印の描している先が見える。黒板下の壁の部分。そこにも落書きがあった。

『この落書きを見つけた人にどうかお願いです。わたしの話を』

その落書きの最後にもやはり矢印が添えられていた。

今度はまっすぐ左、窓の方へ。

剛がなんとはなしに矢印の誘導に従つてみると、思つたとおりまた別の落書きにぶつかった。

『読んで下さい。わたしはあなたをずっと待つていました』

剛は回りを見回してみた。

もちろん誰もいない。いるはずもない。

その落書きの最後にもやはり矢印があり、窓の下の壁に沿つて別の落書きを指していた。そちらの落書きの最後にも矢印が見える。どうやら一連の落書きは矢印で繋がっている様子だった。剛は矢印を追いかけてみた。

『わたしはいつもこの学校でいじめられ』

『いじめられていきました。わたしは一人ぼっちでした。だから

『だから死のうと思いました。わたしは屋上から飛び降りました。
しかし』

『しかし死ねなかつた。生きていた。動けなくなつてゐるわたし
を見つけた』

『のはわたしをいじめていた奴でした。助けてはくれませんでし
た。わたしが』

『助かれば奴のやつたことがばれますから。だから動けなくなつ
ているわたし』

『わたしを穴に埋めました。生きたまま埋められました。苦しか
つたです。そして』

『そして、わたしは死にました』

そこまで読んで剛はふつと笑つた。

なんだ。やつぱりただのイタズラか。

矢印は更に続いている。

黒板から壁、柱、また黒板、倒れた机、床へと。
落書きの文字は少しづつ小さくなり、段々と側に行かないと読め
なくなつてきている。

『苦しかつた。今も苦しい。このままで』

『このままでは死んでも死にきれません。だからどうかお願いで

す。わたし 『

そしてまた矢印。
その矢印を辿って教室の中央を横切ろうとした時、剛は急につんのめつた。

ずぶりと床が抜け、足下の感覚が無くなつた。

たくさんの中材でよく見えなかつたが、床は壊れており、そこに大きな穴が空いていたようだつた。

しまつた！

身構える暇も無く、剛は穴の中に落っこちた。
穴は深く、剛はそのまま縁や壁面に身体をぶつけながら底まで落ちていつた。

「痛え！」

尻餅をついて倒れ込んだ。しばらく痛みが過ぎるのを待つて、なんとか身体を起こす。

「痛ててて……」

腰をさすりながら立ち上がつた。身体のあちこちに擦り傷ができるいた。

しかし狭い穴の壁面に身体をぶつけた落ちたおかげでスピードが緩まり、なんざも骨折もすること無く穴の底に到達することができたみたいだつた。

「畜生！ あんないたずらに引っかかるなんて」

上を見上げた。丸く切り取られた光が見える。

穴は深かつた。あそこまで昇るのは一苦労だらうといふござりした。目が暗さに慣れてくると、回りの様子が見えてきた。

穴の内部は石造りの井戸のようだつた。

いつたいこにはじこだ？

いぶかしむ剛の足先にこつんと軽いものが触れた。

丸いものらしく、ころりと転がつていく。

足元に視線を移すと、バレー ボールくらいの白く丸いものが見えた。

なんだ？

不用意に顔を近づけたことを一瞬で後悔した。

それは、人間の頭蓋骨だつた。

「うわあああ

びつくりして後ずさると、今度は踵にもさつきと同じじく軽い硬いものが当る感触がした。

全身がビクツと震えた。

剛は一旦深呼吸をすると、勇気を振り絞り、振り返つて下を見た。

……。

想像していた通りだつた。足元にいつのものだかわからない白骨が転がつていた。

それが理科室の標本でない証拠に、骨はぼろきれのような服を纏つてゐる。

あの落書きの主だ。

剛はそう直感した。

落書きの主は自分を発見して欲しかったに違いない。

こんなところで殺されて、ずっと一人ぼっちだったなんて。……かわいそうじ。

珍しくまじめな気持ちになり、剛は骨の前にしゃがみこむと畠を開じて両手を合わせ、じぱりくお絆らしきものをつぶやいた。しかし、再び畠を開けたとき、剛の頭にちょっととした疑問が浮かんだ。

なんでここには頭蓋骨が二つもあるんだろ？

畠の前の状況にちょっと納得がいかなかつた。

剛が落ちた穴の向こう側、連れなかつた矢印の先、床の上。剛にはもう読むことはできないが、そこには小さな文字で、こう書かれていた。

『だからどうかお願いです。わたしより苦しんで、苦しんで死んで下さい』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6172d/>

落書き

2010年10月9日22時45分発行